



# 正宗白鳥全集

## 第十八卷

戲曲二・對談

福武書店



## 正宗白鳥全集第十八卷

一九八五年十一月二十日 印刷

一九八五年十一月三十日 發行

著者 正宗白鳥

發行者 福武哲彦

發行所 株式會社 福武書店

東京都千代田區九段南二丁目二八

〒102 電話 (三) 三〇一三三

振替口座 (東京) 六一〇五九七

印刷・製本 大日本印刷株式會社

定價 六八〇〇圓

第二十四回配本 (全三十卷)

(落丁・亂丁本はお取り換え致します)

正宗白鳥全集

第十八卷

|                  |                  |                       |
|------------------|------------------|-----------------------|
| 監<br>修           | 編<br>集           | 裝<br>丁                |
| 井<br>伏<br>鱒<br>二 | 山<br>本<br>健<br>吉 | 中<br>島<br>河<br>太<br>郎 |
| 中<br>村<br>光<br>夫 | 紅<br>野<br>敏<br>郎 | 山<br>高<br>登           |

第十八卷 戲曲二・對談 目次

春の夢

二

隣同士

三

退屈

五

みち子ときみ子

六

午後の客

八

浮世の末

一〇

一萬圓

二五

みんな出鱈目

二四

死の敗亡

一六

喜劇の輕井澤 一五

悦しがらせる 二七

アントニーと  
クレオパトラ 二三

岩見重太郎 二九

高原の怪談 二五

天使捕獲 二四

侵入者 二六

江島生島 三〇

死んだやうな平和 三六

對談

文藝談論 (馬場恆吾) 三七

大作家論 (小林秀雄) 三八

藝談義 (三宅周太郎) 四六

三代文學談 (柳田國男) 四七

問答有用 (徳川夢聲) 四九

文學青年と青年文學者 四三

(龜井勝一郎)

一世紀を生きぬく法 四九

(徳富蘇峰)

日本文學の流れのなかで 四九

(江藤 淳)

ナポリを見て死ね 五〇五

(戸塚文子)

思ひ出す人々 五二

(佐藤春夫)

解題 中島河太郎 五三



戲  
曲  
二



春の夢

一

牛込區矢來町。中原平作の邸宅。和洋折衷の新築で、庭園には、樹齡の老いた八重櫻が一本あつて、花は略略散つてゐる。

その櫻樹のほとりに、平作の弟、中原陽吉（四十歳。脆弱らしい男）が、脇掛椅子を据ゑて、それに、氣樂さうに身を埋めて、靜かな春の光を浴びながら、西鶴の「好色五人女」の第四卷、「戀草からげし八百屋物語」を讀み耽つてゐる。そこへ、平作の次女伊津子

（二十一歳。斷髮洋裝の美女）が、派手な帽子を被り、手に風呂敷包をもつて、外から歸つて來たところらしく、邸宅の一角から現れて、陽吉の側へ近づく。

伊津子 叔父さん。御勉強？……何、讀んでいらつしやる？（甘つたれた口調で云つて、覗き込む）

陽吉（振り返つて微笑して）今日は何處へ行つてゐた？

伊津子 石本さんのお宅へ。……でも、ふみちやんがゐなかつて詰まらなかつたわ。

陽吉 今日風がないから、街上を歩いてゐても氣持がいいだらう。

伊津子 でも、何處へ行つても人が一杯で煩いのね。あたし久し振りで鎌倉の海が見たくなつてよ。叔父さん、連れてつて下さらない？

陽吉 お父さんが承知すりや連れて行つてやるよ。

伊津子 あたし、お父さんに無斷で行つてもいいのよ。叔父さんが連れて行つて下さりさへすれば。

彼女はこんな話をしてゐるうち、陽吉の持つてゐる書物を覗いてゐたが、つひにその書物を手に取つて、

伊津子 これ、面白い御本？

陽吉 あゝ、面白いよ。あとで貸して上げるから讀んで御覽。

伊津子 西鶴（と、書物の表題を讀んで）あたし、この作者の名前を知つてゐてよ。どんなことが書いてあるの？

陽吉 そりや面白いことが書いてあるさ。おれは、二十歳時分に——さうだ、丁度お前くらゐな年齢に、はじめて西鶴を讀んだのだね。（伊津子を見て感慨に耽つてゐるらしく）この「五人女」の八百屋お七のところを暗記するほど讀んで、しまひには、お七の姿が目のさきにちらちらつくらゐになつてゐたのだが、今日讀むと、あの時分とはまるで氣持が異つて見えるよ。

伊津子 八百屋お七と云つてどんな女？

陽吉 お前は、八百屋お七のことを知らないのか。小姓の吉三に會ひたくつて放火をして、鈴ヶ森で火あぶりにされた有名な女ぢやないか。

伊津子 あたし、そんな女のこと聞いたことないわ。放火したり火あぶりにされたりして、いやな話ねえ。あたし、そんな女には興味が有てないわ。

陽吉 まあ、さう云はないで、この書物を貸して上げるから、讀んで御覽。昔の女の話だつて馬鹿にしたものぢやないよ。……全體こんな櫻の花の散りかゝつた所へは、お前のやうな現代女よりは、振袖姿のお七が現れた方が、よつぽどよく似合つてゐるんだ。

伊津子 あたしがゐて不似合ひなら、あちらへ行つちやぶからい。

伊津子が笑つて行きかけると、陽吉、手を伸して留める。

陽吉 まあ待て。ちよつと聞きたいことがあるんだよ。

……石本の叔母さんはどんな顔してゐた？

伊津子 （不思議さうに）石本さんの叔母さんの顔？ あの方の顔は不斷と異つてやしないわ。叔父さんはなぜそんなことをあたしに訊ねるの？

陽吉 おれは十年以上もあの人に會つたことないのだから、いゝ加減お婆あさんになつて、顔に皺が出来てやしないかと思つて訊ねたのだ。

伊津子 あら、石本さんの叔母さんの顔には皺なんか出来てやしないわ。随分綺麗よ。ふみちゃんのお母さんとは思へないほどに美しいのよ。

陽吉 さうかなあ。

彼れが何かを思ひ浮べて黙つてゐると、伊津子が行きかける。そこへ、西洋室の窓が開いて、伊津子の姉知恵子（二十二歳、頭髮は手輕に西洋風に結つて、不斷着の和服を着てゐる）が顔を出す。

知恵子 叔父さん、そこにいらつしやつたの。あたしそこ

へ下りて行きますわ。待つていらつしやい。

彼女がさう、聲を掛けたので、伊津子は足を留める。

陽吉は椅子を離れて、快活に手を伸して、天に向つて欠伸をする。知恵子が軽快な足取りで入つて来る。

知恵子 叔父さんは何時の間にこんな所へ椅子を持ち出したんです？

陽吉 春の日光を全身に浴びようと思つて。……

知恵子 日光浴をなさるのなら、鎌倉の濱でなすつた方がよかなくつて？ こんな狭苦しいお庭の中で、埃くさい空氣を吸つて日光浴したつて、大した效能はないだらうと思はれますわ。

陽吉 それは當然の理窟だね。(櫻樹のほとりを歩きながら) しかし、鎌倉のおれの家の庭で一人ぼつちで日光浴をしてゐたつて面白かないからね。

知恵子 鎌倉のお家なら、あたし、いつだつて行つたげますわ。

伊津子 あたしだつて、鎌倉へなら、何時だつて行つたげますわ。

陽吉 ハ、ハ、おれも色男だな。お前達のやうな美しい若い女に隨き纏はれて。……だけど、お前達を鎌倉へ連れ出すことは、お父さんが承知しないだらう。おれが一週

間ばかりこの家の厄介になつてゐるのさへ、お父さんはいやがつてゐるらしいから。……おれの思想が若いお前達に感染すりやしないかと、お父さんは心配してゐるんぢやないか。

伊津子 叔父さんの思想と云つて、どんな思想？

知恵子 共產主義でも社會主義でもなさうだし、どんな思想か知ら。

陽吉 おれに思想もなにもあるものか。お前達の方が却つて過激な思想を有つてゐるんだよ。

知恵子 あんなひどいことを。……あたし達ほど溫和な思想を有つてゐる人は、滅多にありやしませんよ。

伊津子 (考へて) 叔父さんは怠けものだから、怠け癖が傳染しちやいけないと、お父さんは心配してゐるんぢやないこと。

陽吉 あるひはさうかも知れないね、(家の方を見て) かうしてお前達と話をしてゐるところを、お父さんに見られたら、よく思はれないに違ひないよ。……おれも、今日中に鎌倉の穴の中へ引込むことにしようかな。

伊津子 あたしを連れて行つて下さらない？

陽吉 さういふ譯には行かないよ。

知恵子 叔父さん。本當に今夜鎌倉へお歸りになるの？

あたし、祕密<sup>ひみつ</sup>で叔父さんに御相談したいことがあるんだ  
けど。

陽吉 ホウ。お前がおれに相談したいことがあるのか。ぢや此處で云つたらいゝぢやないか。

知恵子 でも。……（妹を氣にして躊躇する）

陽吉 伊津子がゐちや云へないのか。（伊津子を見て）ぢや、お前はあちらへ行つといでな。

伊津子 あたしが聞いちやなぜいけないの？（不機嫌らしく云つて、動かないでゐる）

陽吉 人間は妹にだつて聞かせたくない話があるものだよ。……意地惡をしないで、ちよつとの間、彼方へ行つといでよ。

知恵子、當惑した態度をして黙つてゐる。伊津子は不平らしい顔して動かないである。陽吉は緊張した光景を訝りながら見てゐる。やがて、

陽吉 ぢや、その話は一先づ見合せることにして、家へ入つて紅茶でも饗<sup>や</sup>んで貰ふことにしようか。

伊津子（ふと尖つた聲で）あたしには姉さんの相談事が分つてゐてよ。

陽吉（驚いて）分つてゐるのなら、お前が側にゐて、聞きたがらなくつてもいゝぢやないか……まあ、その話は後

にしよう。

陽吉は行きかける。

知恵子 伊津<sup>いづみ</sup>ちゃんに聞かれて困るやうなことぢやないのよ。あたし、今此處で叔父さんにお話しするわ。

陽吉 ぢや、承らうか。……若い女でおれに打ち明け話を聞かせて呉れるのは、お前達ばかりだ。

彼れは、それに興味を感じたらしく云つて、椅子に腰をおろす。知恵子、その前に立つ。伊津子、少し離れて立つ。

知恵子 あたし、此處にゐちやいけないことが出来かゝつてゐますの。五月のはじめまでには、人の氣のつかない所へ行つてゐなきやいけないと思つてゐるんです。

陽吉 親の家にゐちやいけないと云ふのは變だね。どういふ事情があるんだ。

知恵子 五月の十日頃までには、エンブレス何とかいふアメリカの汽船が横濱に着くんですつて。その汽船が着く前に、あたしはどうかしなきやいけないの。

陽吉 その汽船で誰れか西洋から歸つて来るんだね。……それで。

陽吉、座を乗り出して訊く。知恵子、語るに躊躇してゐる。